

研究動向

観光人類学研究動向

—観光と文化、ホストとゲストを中心に—

李良姬

はじめに

「観光は我々の世界で重要な社会的な事実になった。人類学者が、これを認識して観光の研究を人類学的な課題として扱うのは遅かった」(Nash, 1996: 17)。現代社会で観光はもっとも重要な産業のひとつであり、人々の生活と大変密接な関係を持っているといえる。観光に関する統計に少し目をむけてみると多くの人たちがなんらかの観光活動をしており、国内はもちろんのこと国外への観光客は年々増え続けている。

現在観光に関する研究は様々な分野で活発に行われている。特に経済学や地理学などの分野においては早くからそれに関する研究が行われていた。一方、観光に関する人類学的な研究が幅広く行われるようになったのは最近になってからである。それは、一部の国家や地域を除いた世界各国での観光実態調査が容易になったことや、人類学者が観光現象に関心を持つようになり、観光人類学の研究における著しい成果が得られたことによるものである。観光人類学研究では観光の国際化や社会の多様化にともない、様々な分野についての研究が行われるようになった。観光と開発問題、観光と環境、観光とメディア、観光と民族、観光と性など観光人類学の研究分野は数多い。そのなかでも、特に観光と文化、観光活動におけるホストとゲストの問題は観光人類学においてもっとも重要なテーマであると思われる。なぜなら文化的魅力の有無は、観光という行動様式の持続に密接に関係しているからである。観光の大きな魅力は訪れた観光地域に存在する「文化」を楽しむことであるため、観光と観光地の文化をめぐる問題は観光人類学の研究において欠かせない。また、後述するようにホストとゲストの問題は観光と深く関わり注目されてきた。

本研究動向では、観光人類学の誕生背景と経過について先行研究を中心に考察していく。さらに観光が文化、特に伝統文化に与える影響と観光客を受け入れる側であるホスト社会のなかで起きる問題と、ゲストとホストの関係について分析する。

一. 観光人類学の誕生とその後の経過

観光現象のもつ経済的側面や地勢的側面は早くから研究がなされていたが、観光が人類学的な研究対象になったのはそれほど古くない。なぜ人類学者は観光を研究テーマとして扱わなかったのだろうか。それについて江口信清は、「余暇に行われる観光は一種の遊びであり、そうであるがゆえに研究に値しないと考えられたからである。さらに、人類学者は観光客のように好奇心をもって様々な土地を訪れ、様々な民族の文化を「覗き見」してきた、ということから人類学者自身が観光客と間違われることをひじょうに嫌ってきた」（江口、1998：8）と述べている。人類学者にとって、観光現象および観光客は、調査の過程においても、伝統文化の継承面においても歓迎される存在ではなかったと思われる。山下晋司も、観光の人類学的な研究が遅れた理由として「人類学者自身が調査地で観光客と同一視されることを嫌い、観光に好意をもっていなかったし、観光は近代的な現象であって伝統文化に関心をよせてきた人類学者にはあまり魅力的なテーマではなかったからだ」（山下、1996：6）としている。

人類学において観光が研究テーマとして登場したのは、1974年メキシコで行われたアメリカ人類学会において観光に関するシンポジウムが開催されたことがそのはじまりであった。このシンポジウムの内容はその後、バレーン・L・スミスによって *Hosts and Guests: the Anthropology of Tourism* として刊行される (Smith, 1977)。そこでは、観光客を受け入れる側であるホストとその地域を訪れる観光客であるゲストとの関わりが論じられている。この論文の序論でスミスは「ホストとなる側の人々にとって観光活動は、様々な意味で有益である場合が多くある。それは、観光産業によって新たな雇用が創出されたり、地域に落とされるお金が、増加するという面であるが、同時に一方で、観光客の数が増加するにつれて、社会的な面だけでなく、精神

的な面でもホスト側の負担は大きくなっていく」(スミス、1991:17)と述べている。ホスト社会にとって観光活動が活性化することは必ずしも有益になることばかりではない。善し悪しは別として、ホストとゲストの間には様々な問題が発生し、ホスト側が文化変容などを強いられる場合もあるだろう。

上述の *Hosts and Guests: the Anthropology of Tourism* が発行された後、観光の人類学的な研究はヨーロッパにおける観光研究などを中心に活発に行われるようになり、観光は人類学の一つの研究分野としての確かな位置を占めるようになった。「人類学者による観光活動に対する関心は、文化接触とその結果生じる社会—文化的変化に対する一般の興味と関連しているように思われ、それは、近年の社会—文化的な研究を大きく活気付けているテーマである」とデニツソン・ナッシュがいつているように(ナッシュ、1991:51)観光人類学の分野では近年活発な研究が行われている。そのなかでもジョン・アーリは、ミシェル・フーコーの医学の「まなざし」の概念をヒントに観光を取り上げている。彼は、人々がどのように日常生活から離れ、なぜ旅行をするのか、観光のまなざしがどのように変容し発展してきたのかについて述べている(Urry, 1990)。

観光人類学の研究が活発に行われている現在、これからの研究の方向について考える必要があると思う。ネルソン・グレーバーンは観光人類学の三つの研究方向を提示している(Graburn, 1983)。そのひとつは相異なる国家的、階級的文化を持つ観光客に対する比較研究である。二つ目は、観光文化と制度発展の相互作用が持つ重要性に関する研究、この研究では、直接的には観光産業の一部にはならないが、観光に大きな重要性を持つものがその対象になる。それには博物館やお祭りなどが該当する。三つ目は、発達論的研究あるいは伝記的研究である。すなわち個人の社会心理的生活周期の中での世界観と観光研究の関係を究明することである。グレーバーン自身の観光人類学の研究方向をみると、観光客に焦点をおいた観光客の精神的な面に注目した研究方向を提示しているように思われる。

日本では、1988年に橋本和也が「観光人類学の問題点」という論文を発表してから、観光人類学的研究が本格的になされるようになる(橋本、1988)。彼はこの論文で、観光人類学が問題とすべき点を、ツーリストと彼らを迎え

るホスト社会を中心に考察している。また、フィジーのツーリズム観の変遷を取り上げた論文では、「他者が望むイメージに応じて観光産業は発達してきた。今まで西洋世界からイメージを押し付けられてきた第3世界は今自らイメージを発信しようとしている。しかしこの作業を、西洋文化の中で育まれてきたツーリズム産業の中で効果的に行うのは決して容易ではない。これはまさに第3世界が抱える政治・経済の問題そのものであると言える」（橋本、1993：87）とし、地元住民による観光開発の問題点について述べている。

国立民族博物館の特別研究「20世紀における諸民族文化の伝統と変容」の第4年度の研究活動を集約するために開催されたシンポジウム「観光の20世紀」の報告書が1996年石森らによってまとめられた（石森、1996）。この報告書は、19世紀から20世紀までに至る観光の変遷や諸民族における観光と文化の変容に関する研究である。

山下は、インドネシアのバリ島でのフィールドワークを中心に、伝統文化が観光化によりどのように再創造され、持続されてきたかについて考察している。また、インドネシア独立後、国民文化を創出していく過程、バリが植民地時代の遺産を文化観光というかたちで流用していくさまを描いている。最近、バリ観光において注目されている日本人観光客、とりわけ女性観光客の観光現象には興味深い点がある（山下、1999）。

日本での観光人類学の研究における画期的な研究論文集は山下編の『観光人類学』であろう（山下、1996）。近代における観光の特質、観光のしかけ、観光の民族史、観光が作り出す文化などについての論文で構成されている。

観光がメインではないが、インドネシアのバリ島における中央政府と、バリ州政府による観光政策についての調査報告がある（鏡味、2000）。

近年、日本の人類学者による観光研究は様々な分野で活発に行われている。しかし、江口は「日本の人類学者による観光研究は、現在でも緒についたばかりであり、既存の概念枠から観光現象を分析するに留まっている」と指摘している（江口、1998）。橋本も「このように観光人類学の研究概要を紹介すると、多少は活発な印象を読者は持たれるかも知れないが、その内容が充実しているとは言い難い。当初は、各研究者がいままで従事してきた「本来」

の調査・研究の合間に、たまたま収集した資料を発表したものが多かった。発表者のほとんどは観光研究に対してどのような立場に立ち、どのような展望を抱いているのかといった基本的な姿勢を整えずに、観光にちょっと言及しただけであった」（橋本、1999：8-9）としている。今後、観光現象に焦点をあてた調査分析を通じ、新しい概念の構築と研究の深化が望まれる。

二. 観光と文化 —伝統文化の創造—

エリック・クリスタルは、インドネシア・スラウェシ島にあるトラジャの葬儀儀式が観光化により、商品化され、変質してしまうと述べている。また、「もはや伝統文化の継承者は自分たちの宿命を誇りと思わず、観光客の目を楽しませるために「風変わりでおもしろい風習」の提供者と化してしまっている」と指摘し、葬儀儀式が観光客の見世物になり、観光活動も外部の者により行われ、利益も外部のものになっていくことを懸念していた（クリスタル、1991：193-213）。デヴィッド・J・グリーンウッドも、スペインのバスク地域にあるフェンテラピアのアラーデ儀式的事例をあげ、350年間も続いてきた文化が商品化されることにより、地域社会が受けた影響について論じている。地域住民のために行われていた儀式が観光客のために演じられるようになり、儀式の固有性と人々にたいする儀式の力を破壊し、儀式の尊厳さを侵したとしている（グリーンウッド、1991：235-249）。それにたいして山下は「観光は文化との関係においてしばしばネガティブに論じられてきた。つまり、観光開発が伝統文化を破壊するといった議論である。しかし、伝統文化の破壊は観光開発のみに帰することはできないし、こうした議論ではそもそも「伝統文化」というものをあたかも太古から連続とつたわってきた本源的な実体として理想化するという誤ちを犯している」（山下、1996：108）といい、パリの観光文化を通して、むしろ観光が伝統文化を刺激し、新しい文化創造のための刺激剤になっていると主張している。また、文化がたんに保存されるだけでなく、研究者や観光客のために再創造された点を強調している。

クリスタルはその後のエピローグで、「儀式での観光客によるもてなしへの付け込み、そして外部世界との接触の増大によって促進された文化変容の

経済的、社会的影響力があるにもかかわらず、トラジャの宗教的、芸術的、そして儀式的伝統は衰えていない。トラジャの儀式は純粋なものであり、観光客の見世物ではない。非常に多くの観光客を世界から惹き付けているターナ・トラジャの文化的遺産の多くを受容する伝統主義の指導者たちは、観光活動の恩恵を受けてはいない」(クリスタル、1991:228-229)と言い、観光が伝統文化を保護・発展させるとまでは論じていないが、観光が伝統文化を変化・破壊させるとしていた初期の論文とはやや異なったエピソードであった。

グリーンウッドもその後に書いたエピソードでは、「私自身もふくめた多くの人類学者が、観光活動が地方文化をとり込んだり破壊したりすることについて書いてきた。この批評は、いまだに正当なものであり、分析と予言の双方を確かなものにする例として十分通用する。しかしながらこのような考察は、すべての過程の部分を見ているのみである」(グリーンウッド、1991:251)と述べている。このように、これらの研究者の観光活動と文化に関する見方は変化したのである。

江口は、「カリフナの舞踊や歌は明らかに新たに作り出された伝統である。観光客に舞踊を見せる舞台上のカリブ族は白いパンツを身につけ、頭に布バンドをまいて、アフリカ系のドラムを叩きながら、男女が一緒になって踊る。そうすることで、カリブ族の新たな伝統文化を高らかにアピールし、自分たちの新たなエスニック・アイデンティティを確立していく。しかもその行為は経済的な利益にももちろんつながっている」(江口、1998:172)と指摘している。彼らの歌や踊りは観光客に見せるためのものではあるが、それを演じることによって伝統文化が守られ新しい文化が生まれ出される。観光客に見せるために演じられる歌や踊りは観光客の要望によって変化することはあっても、それらは文化破壊とは言えない。

ゲスト側の観光活動だけが文化変容をもたらすのではなく、文化変容はホスト側の社会変化などから起きる問題でもある。

三. ホストとゲスト

一般的には豊かな生活をしている人が観光をすると考えられるが、彼らが

貧しい観光地に行くとそこでは、文化的価値、経済的発展が異なるために、ホストとゲストの間には摩擦が生まれる。

アーリは、ホストとゲストの間に成立する独特の社会的関係の要因を次のようにあげている。(アーリ、1995 : 101-105)

- ①地元民の人口ならびにまなざしを向けられる対象の規模に対する現地を訪れるツーリストの“数”
- ②観光のまなざしの主たる“対象”
- ③当該のまなざしの“性質”とそこから生じる客の空間的、時間的<集中状態>
- ④大衆のまなざしを供給するべく発展している産業の“構造”
- ⑤“既存の農業活動と産業活動”への観光の影響
- ⑥客と地元民の大半との間の経済的、社会的“格差”
- ⑦大衆観光客が“施設とサービスに独自の基準”を要求する、その程度
- ⑧当該国の“国家”が観光開発を熱心に求めるか、あるいは逆にこれを抑止しようとするかの程度
- ⑨ツーリストが経済的・社会的発展に“好ましくない”と批判の対象となる”度合い

アーリはこのようにホストとゲストの社会的関係の要因を述べる反面、こういう変化は必ずしも観光の結果とは言えないと述べている(アーリ、1995 : 105)。スミスも、「社会の衰退の責任をなにもかも観光活動や観光客そのものに押しつけるべきではない」(スミス、1991 : 24)とし、ホスト社会で起きる問題などは、ゲスト側の観光活動とは関係のないところに存在しているという。

いくつかの観光地域ではその地域内で生じる葛藤がしばしばあった。観光が社会的な不平等を与える例があった。「カリブ族の間には、観光化を私益のために推進したいと考えている人たちと、全体のために推進したいと考えている人たちの二つの勢力がある」(江口、1998 : 176)と述べているように、観光地域内部においても葛藤が起きるとい研究もある。しかし、多くの地域では観光地域内部での葛藤をあまり生じさせないという調査がある。ジェレミ・ボイセインは *Tourism and Development in Malta* という論文で、

マルタ社会での観光が社会発展と経済的な成長、国民的な団結の強化、さらに独立の強化をもたらしたとしている (Boissevain, 1978 : 37-56)。また、マルタでは観光客と地域住民との葛藤もないと主張している。

ホスト側がゲスト側に対して行動の制限を加えている事例を扱った研究として高谷紀夫の『ミャンマーの観光人類学的研究』がある。その中で高谷は「SLORC が、経済開放、市場経済の導入に方向転換をしたにしろ、観光産業発展のためのインフラの整備の遅れは否定できず、また国際観光市場への参入を宣言しても、観光産業があくまで軍事政権の政治的戦略の中で展開していることに変わりはない。換言すれば、政府主導の「政治観光 Political Tourism」の一事例なのである」(高谷, 1999 : 88) といっている。ゲストの行動を制限し、政治状況に関心を示さないことをホスト側である現軍事政権 SLORC は望んでいる。国際的な立場や経済的な戦略により、観光市場を開放はするが、観光以上の政治を含めた国内問題には干渉されたくないのがミャンマー政府の本音ではないだろうか。

ホストとゲストの間には一時的でその場限りの関係であるため、それほど深い関係は生じないとされてきた。一時的な滞在で一度限りのものであることが多いホストとゲストの関係を超えた関係が生じるケースについて、バリ観光のなかの日本人を題材として論じた「花嫁は神々の島を目指す」という面白い副題名がついている論文がある (山下, 1999 : 137-155)。バリを観光してバリ男性と結婚した日本人女性は、1995 年現在で 200 人を超え、在留届けを出していない人を含めると 300 人にもなるそうだ (バリ日本領事館)。山下は現地調査の結果、日本人妻の特徴を三つに分けている。

- ①失われた風景をバリで見いだし、「日本の昔」「なつかしさ」を感じる
- ②首都圏を中心とした大都市出身—現代の日本の都市社会に不適応
- ③観光客としてやってきてバリにひかれ結婚

山下は、彼女らが日本国籍を持ったままバリで生活していることに注目し、「彼女らは、二つの国にまたがって生きようとしており、「旅すること」と「住むこと」の距離は彼女らにとってそれほど大きくないのだ」と言い、彼女らは「文化と文化のはざままで自分とのおりあいをつけながら生きているのだ」と指摘している (山下, 1999 : 155)。山下がこの調査をしたのは 1995 年で

あるが、その後のバリにおける日本人女性の観光実態では、麻薬の誘惑や現地男性との関係で起きることなどが社会問題になっている。それらの問題についても研究を深めていく必要があるだろう。観光を通じて起こる結婚問題は、観光人類学ではほとんど扱われていない。また、多くの人が新婚旅行に行くが、それらの調査・研究もほとんどないといえる。今後、新婚旅行をはじめ観光と結婚の問題についての観光人類学的な研究が行われるべきである。

おわりに

観光人類学の誕生から最近までの研究動向について先行研究を中心に述べてきた。観光は観光地の文化に悪影響を与え、伝統文化を破壊するものであると思われやすいが、実際にはそうでない側面がある。むしろ、伝統文化を守り、新しい文化の創造の刺激剤になっていることが、多くの研究で示された。ホストとゲストの問題においても葛藤や摩擦はあるが、互いに好感と理解をもっていることを明らかにした研究も多い。これまでの研究は、ゲストが外国人の観光を取り上げ、そこから生じる文化の摩擦やホストとゲストの問題などについて分析を行った研究がほとんどであった。観光と文化、ホストとゲストの問題の研究をより深めていくためには、ホストとゲストが同一の国や民族の観光に関する研究が補われるべきである。

近年、行政によって創られる観光文化に関する論文が出されているが、それらは経済的な効果や開発による環境破壊などの研究が主であった。今後、新たな研究方向として、観光文化が行政などに創られていく部分に注目し、その過程と結果についての観光人類学的な研究が望ましい。

鏡味治也は「政治と文化にまたがる領域で展開される動き、とくに政府が直接の主体となる政策については、従来の人類学の地域共同体研究では外在的な要素としてあつかわれがちであったが、今やそうしたあつかいがじゅうぶんでないことは明らかである」（鏡味、2000：206-208）と主張している。行政と地域住民とのかわりについての人類学的な視点を持ち研究を進めていく必要があるだろう。

文献

- アーリ, ジョン (1995) 加太宏邦訳『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行—』法政大学出版局
- 石森秀三編 (1996)『観光の 20 世紀』ドメス出版
- 江口信清 (1998)『観光と権力—カリブ海地域社会の観光現象—』多賀出版
- 鏡味治也 (2000)『政策文化の人類学—せめぎあうインドネシア国家とバリ地域住民—』世界思想社
- クリスタル, エリック (1991)「トラジャにおける観光活動」三村浩史監訳『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応—』勁草書房、pp.193-231.
- グリーンウッド, デヴィッド・J (1991)「切り売りの文化—文化の商品化としての観光活動の人類学的展望」三村浩史監訳『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応—』勁草書房、pp.235-256.
- 高谷紀夫 (1999)『ミャンマーの観光人類学的研究』広島大学総合地誌研究資料センター
- ナッシュ, デニソン (1991)「帝国主義の一形態としての観光活動」三村浩史監訳『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応—』勁草書房、pp.51-72.
- 橋本和也 (1988)「観光人類学の問題点」『日本文化研究』静岡県立短期大学部日本文化研究室編 1、pp.37-46.
- 橋本和也 (1993)「フィジーにおけるツーリズム観の変遷」『日本文化研究』静岡県立短期大学部日本文化研究室編 5、pp.77-88.
- 橋本和也 (1999)『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方—』世界思想社
- スミス, バーレン・L 編 (1991) 三村浩史監訳『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応—』勁草書房
- 山下晋司編 (1995)『観光人類学』新曜社
- 山下晋司 (1999)『バリ人類学のレッスン』東京大学出版会
- Boissevain, Jeremy (1978) *Tourism and Development in Malta, Tourism*

and Economic Change :Williamsburg, Va Department of Anthropology, College of William and Mary, pp.37—56.

Graburn, Nelson (1983) *The Anthropology of Tourism, Annals of Tourism Research*, New York: Pergamon, pp. 9—33.

Nash, Dennison (1996) *Anthropology of Tourism*, New York: Pergamon.

Smith, V. L. (1977) *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Urry,John (1990) *The Tourist Gaze. Leisure and Travel in Contemporary Societies*, Newbury Park: Sage Publications.